

森見登美彦の はなし

京都大学出身の作家、^{もりみとみひこ}森見登美彦をご存じだろうか。作家と聞くと文学部を思い浮かべる方も多いと思うが、なんと文学部ではなく農学部を卒業された方である。代表作に『ペンギン・ハイウェイ』『夜は短し歩けよ乙女』などがあり、映像化されている作品も多数あるので、ぜひ一度触れてみてほしい。

しかし、有名な作品が多すぎてどこから手をつければよいのやら迷ってしまう方もいるだろう。そこで今回、数ある森見登美彦作品から編集部員がおすすめを3作品選び抜いた。森見登美彦作の書籍『有頂天家族』『恋文の技術』に加え、森見登美彦原作の映像作品『四畳半神話体系』も紹介する。

(一沫・待ノ介・渡舟)

今回紹介する**3**作品はこちら



一沫のおすゝめ

有頂天**家**族

686円 (税別)

京阪電車を降りて、鴨川をわたってすぐのところにあり、^{しもがもやまぶらう}下鴨神社。そこに住んでいるのが、主人公下鴨矢三郎だ。東山の如意ヶ嶽の天狗に憧れ、人間をまねるのを好む彼の正体。それは狸だ。ところがこの狸、普通の人間より人間味のある狸なのだ。大学で天狗による講義を聞き、狸間の権力争いを繰り広げる。憎まれ口を叩きあう兄弟を持ち、母親が待つ家もある。惚れた女の子にちょっかいをかけ、そのせいで追われる身になることもある。

こんな自由人、もとい自由狸の原動力は父親の口癖だ。

「阿呆の血のしからしむるところだ」

阿呆の血というのは、古くから狸に受け継がれてきた

人間をまねるという性癖のことだ。百万遍で腐れ大学生に化けてうろついたり、タカラヅカ好きの母親が美青年に化ける隣で可憐な美少女になったり、白髪頭の骨董蒐集家として天狗から身を隠したり。矢三郎はさまざまな人物に化けられる。昔から狸寝入り、狸親父のように人間を狸に例えるように、狸もまた人間に化け、その生活をまねて過ごしているのだ。

人間は街で生活し、狸は森を駆け、天狗は空から地上を眺める。古くから京都では、彼らが互いに関わりあいながら生きてきた。本書でもその歴史が文章の端々に垣間見える。心温まる家族愛と成長ストーリーとして読んでもよし、京大周辺を舞台にしたフィクションとして読むのもよし。そして京都の歴史に想いを馳せながら読むこともできる1冊である。

はみだし
すてーじ

メリークリスマス！
⇒孤独な夜でしたね。

(理・4 イカ息子)
(……でしたよね? ; 編)

渡舟のおすゝめ



恋文の技術

1,500円 (税別)

手紙を書く人は、SNSの発達した現代においては少ないのかもしれない。すぐに届く上に費用もかからない。書く手間に至っては雲泥の差である。スマホに慣れない世代はともかく、好きこのんで手紙を書くような若者はよほどの変人なのだろう。

そんなよほどの変人が、今回紹介する『恋文の技術』の主人公だ。名前は守田一郎^{もりたいちろう}、大学院生だが肝心の研究には打ち込めず成果も出せず、それでいて虚栄心だけは一人前。森見登美彦十八番の冴えない主人公そのままである。とはいってもこの作品で主人公が直接描かれることはない。『恋文の技術』は守田一郎がしたためた手紙集なのだ。

友人へ。妹へ。あげくの果てにはひょんなことから知り合った森見登美彦なる小説家へ、そしていつかはあの

人へも。これらの手紙を通じて、読者は主人公像を推し量る。友人に愚痴ったり、妹にくだらない冗談を織り交ぜつつ見栄を張ったり。そんな手紙から浮き彫りになるのは1人の頼りない大学院生だ。人間関係に悩み、将来に迷い、自分に嘘をつき、恋に焦られる。読者と何ら変わらない、等身大の人間像がそこにはある。

手紙。届けることはできても、返事が必ず来るものでもなければ、なかったことにできるものでもない。手紙が届いた時にどんな気持ちで受け取り、どんな表情で読み、どんな言葉で喜んだか、来るとも知れぬ返事を待つ間は想像するしかない。だからこそ一言一句を慎重に選び、気持ちをそのままに伝えられる言葉を際限なく探してしまう。その在り方はまるで、恋心そのものではないか。きっとSNSでは届かない想いが、この作品にはある。

待ノ介のおすゝめ

四畳半神話体系

Blu-ray 16,000円 (税別)

森見登美彦作品の中には映像化されたものも多く、文章での表現とはまた違った印象を与えてくれる。今回紹介するのは、同名の小説を原作とするアニメーション『四畳半神話体系』である。主人公である「私」は冴えない大学3年生。入学当初は薔薇色のキャンパスライフを夢見たが、理想とはほど遠い大学生活を過ごしてきた。この作品はそんな主人公の「あの時にあの選択をしていれば！」という後悔をもとにした平行世界を描く作品である。

この作品にはアニメーションならではの美点がある。この平行世界で展開されている物語はある型に沿っていて、多くの世界で似通った結末を迎えることになる。アニメーションは本と異なり1話という区切りがはっきりとしている。そのため、アニメーションではこの1話完

結型の平行世界の意味合いがより強調される。また、原作では物語の世界観を文面から想像していたところを実際に聴き、見ることができるのもアニメーションの良さの一つである。森見登美彦作品に特有の長々と理屈をこねくり回す心の声がスラスラと流れる様子を聴くことで、「私」の人となりになることができる。さらに馴染み深い京都の街並みの描写を見ることでより深く物語に没入することができる。

この不思議な物語の最終回では、今まで別々のものだった多くの平行世界がつながり始め、それぞれの世界で散らばっていた伏線が回収されていく。そこでは幾多の後悔の果てにたどり着く大学生活の結末が描かれる。「私」の反省と可能性で満ちた、不条理で苦い青春をぜひアニメーションで見届けてほしい。

はみだし
すてーじ

あ！ UFO！
⇒道理でさっきから人が消えてると思いました……あ！

(葉・3 りんちゃん)
(墜落音！；編)